

豊田市美術館：童子苑

童子苑の茶室は豊田市美術館の本館から離れた場所にあり、彫刻テラスとの間には高い生け垣が設けられている。木造平屋建て、四角い窓の飾り気のない建物は、周辺のモダニズム建築とは対照的。童子苑は、他の美術館の建築物と同様、谷口吉生（1937 年生まれ）の設計によるものだ。谷口氏は、ミニマリズム、直線の使用、柔軟で機能的な空間など、日本の伝統的な建築と近代建築の共通点を示すことを意図してこの童子苑を設計した。

襖や瓦屋根、庭などは伝統的な茶室の特徴を備えている。しかし、茶室には床から天井までのガラス窓があり、静かな苔の庭の眺めを引き立てている。来館者に開放されており、抹茶と伝統的な季節のお菓子を提供している。畳の上に膝をついて座るのではなく、テーブルの前に椅子を置いて座るという「立礼」スタイルであり、正座に慣れていない人にも適している。茶室には貸切のみとなっている伝統的な畳の部屋もある。

茶室のすぐ外の庭には、茶道の前に手を洗うための「つくばい」がある。このつくばいに付随しているのが「水琴窟」である。水琴窟とは、上部に穴の開いた壺を水盤の近くに埋めたもので、手を洗うと水が土を伝って壺の中にゆっくりと入ってくる。その水滴は、地上まで聞こえる、メロディアスな水しづきのような音を奏でる。